

子どもと「音」との関係性について（Ⅰ）

— 子どもが「音」と出会う経験の意味 —

河内 奈穂

松山東雲短期大学

A Study on Relationship between Children and Sounds (Ⅰ)

— How Children Encounter with sounds ? —

Naho KOUCHI

Matsuyama Shinonome Junior College

Kuwabara, Matsuyama

(Received Jan. 18, 2019)

1. はじめに

平成29年改訂の幼稚園教育要領の中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が10項目示された。その中の一つ「豊かな感性と表現」には、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」¹⁾と示されている。このことから、子どもが生活の中で心動かすものにふれることで豊かな感性をもち、感じたことや考えたことを自分なりに表現し、保育者や他の子どもに受け止められる喜びを感じる経験を幼児期の間に積むことが重要であると考えられる。また、その表現する喜びを感じた経験が、小学校以降の生活を意欲的に進める素地となることも併せて示された。

生活の中で子どもの心が動き、周りがそれを受け止めたことで、楽しみながら自己表現した出来事として次のような事例があった。食事中、子どもが持つ

ていたスプーンが偶然コップにあたって音が鳴った。驚いた表情で保育者を見たので、「わ！音が鳴ったね！」と伝えた。すると、何度もスプーンで同じコップを叩きその音色を楽しんだ。更に、他の食器も叩き、音の違いを比べて面白がるということがあった。偶然「音」が鳴ったことに対して驚きの感情を保育者と共有したことで、「音」をとおした保育者との関わりを楽しんでいるようだった。また別の事例では、夜空を一緒に見ている時、子どもが両手を高く上げて、「(ほ) しー！」と声をあげたので、保育者が「きらきら星」を歌った。すると何度も「(ほ) しー！ (ほ) しー！」と言い、両足で足踏みをして身体を横に揺らしながら喜んでいった。まだ歌詞で歌えるほど発声の発達はないが、「きらきら星」の歌に合わせて身体を横に揺らしながら、保育者と一緒に合唱しているようだった。この両者とも、普段の何気ない一瞬の出来事だが、子どもが受けた感情を周りの人間が共感し受け入れる事が、表現する楽しさにつながった場面であるといえる。

上記の二つの事例に示したように、表現活動の中

に音楽的な要素が加わることによってより楽しい表現となる。そして、それが子ども自身の基本的な音楽的表現に関する技術の修得につながったり、保育者や友達との良好な人間関係を培ったりする。このことから子どもの成長・発達を考える上で音楽的な表現は重要な活動になってくる。

子どもの音楽活動といえば、歌唱・合奏・手あそびなどを連想しがちである。しかし、歌唱・合奏・手あそびを本当の意味で楽しむためにもその活動以前に、音との大切な関わり（出会い）が多くあるのではないか。例えば、乳児期では「音＝楽器」ではなく、日常生活の中で聞こえる音は全て「音」として捉えており、「声」も「音」として捉えている。志村²⁾ (2016) は、「胎生5か月には聴覚器官が成熟しており、母親の声や心臓が拍動する音を身体で感じているため、母親の声に特別な反応を示す」と述べている。このことは出生前からすでに「声や音」を通した母親との大切な関わりが始まっていることを示している。

「音」をとおした活動において表出される子どもの音楽表現は、身振り手振り、声、表情、動作など身体全体を使って表現される。それらは、つたない表現で音楽とは程遠いものと思われがちであるが、むしろそういった自由で素朴な表出がその後の子どもの豊かな表現力の基盤になると考える。つまり、乳幼児と生活の中にあふれる「音」との出会いこそが、その後の歌唱や器楽などの音楽表現へとつながるのである。外出中、雨や風などの自然音にふと気づき耳をすましたり、目をこらしたりする。また、遊びの中で偶然耳にした起き上がりこぼしの音やメリーゴールの音、あるいはミルクを作る音、手を打ち鳴らした音などを楽しむこともある。このように、子どもが音に対して興味・関心を持つ経験こそが、その後の音楽活動の基礎であり、その延長上に音楽的表現の発達があると考えられる。

2. 本論の目的

本論の目的は、子どもが経験する「音」の重要性について考察することである。そのためにはまず、「音」本来の意味を踏まえ、人はなぜ「音」との関わりが必要なのか、日常生活においてどのように「音」と関わっているのか、人と「音」との関係性について考察した先行研究を調べる。それを元に、子どもはいつから「音」との関わりが始まり、日常生活の中でどのように「音」と出会っているのかなど子どもと「音」との関係性について考察する。

また、音楽表現を高めるために子ども同士の関わりが重要であることは明らかにされているが、(児嶋・古本・山本 2014)³⁾遊びの延長線上にある音との関わりが子ども間でどのように行われているか、フィールドワークも取り入れながら考察する。

加えて、その経験をとおして子どもの音楽的自己表現がどのように進展するのか、そしてそれにはどのような大人の関わりや環境が必要なのかについて考えたい。言い換えれば、保育者に求められる「音」や「音楽」に対する考え方について具体的な事例を交えながら示したい。

3. 人と音、人と音楽の関係

私達は、日常生活の中で無意識に「音」と関わり、「音」がない時間はないと言っても過言ではない。なぜ「音」と関わる必要があるのか、また生きていくうえで「音」や「音楽」はどのような価値や意味があるのだろうか。

「音」はいうまでもなく身の周りの状況を知る情報源である。「見ること」「触ること」と同じように「聞くこと」も人の生活に欠かせない。これらの諸感覚は自分が置かれている環境を知る情報源であり、自分から周りの環境に働きかける手がかりになる。諸感覚は最初別々に発達するといわれる。それが次第に協応 (coordinate) するようになる。例えば、どこかで起き上がりこぼしの音が鳴る。乳児は音を感じ

知すると、その方向に顔を向け、目でその音源を確かめる。それが近くであれば手をのばして触ろうとする。そして自分でも音を鳴らそうとする。ここには聴覚と首の筋肉、視覚、手を動かす筋肉、そして音を鳴らす聴覚の協応が確認できる。

これが幼児期になると少し違ってくる。この頃には構音器官が発達し自分で音（声）が出せるからである。それまでは思うように声をコントロールできなかったため喃語の状態であった。それが空気の量や出し方がコントロールできるようになると、発声が可能になる。母親や保育者の声や歌に合わせて自分も同じ音が出せるようになる。自分の意思でさまざまな音が出せることは音のコントロールでもあり、声が音楽になる大きな変化である。幼児にとってそれは声が楽器にもなることであり、大きなよろこびに違いない。音楽の受け手から歌い手への変貌でもある。非常に興味のある変化である。だが、現時点ではこれ以上の考察はむずかしい。今後の課題にしたい。

井上⁴⁾(2014) は、音楽の起源として、

- ① 農業や狩猟の共同作業での掛け声がリズムを作り、集団の一体化を生んだ。
- ② 話し言葉のイントネーションやアクセントが感情と共に抑揚され歌が生まれた。
- ③ 求愛行動を行うためのリズム、歌、踊りから生まれた。
- ④ 狩や戦いの時の合図や信号に声や楽器を使った。
- ⑤ 魔術や宗教的儀式のために生まれた。
- ⑥ 踊りの伴奏として音楽が必要であった。
- ⑦ 人間の感情が高まった時の声（泣く、笑う、雄叫び）が歌になった。

と7つの仮説を述べている。昔から「音楽」は生活する上で必要なものであり、生活に密着していた。また、人間の感情を表現する重要な役割をも果たしてきた。これは今の時代にも共通している。自分の経験や感情を「音」や「音楽」を通して伝え、その

想いを相手に受け止めてもらい、気持ちが一致したと実感できると、人間関係を構築するうえで大切な、共感・理解・肯定感・一体感などが生まれてくる。これは人間関係を築く上でとても重要なことであり、特に幼少期に必要な経験であろう。古市⁵⁾(2012)は「こどもの心に印象を残したイメージは、心の躍動感を心中に収めることができず、身体が動き、表現につながっていく」と述べているが、まだ言語が発達していない子どもが、言葉で伝えられない感情や想いを「音」や「音楽」をとおして、身体全体で表現することと共通している。子どもの素直で自由な表現を育むためには、子どもの率直な表現を受け止め、子どもの気持ちに共感する大人の存在が不可欠である。子どもの表現力は、周りにいる大人の受け止め方、そして「音」に対する意識の持ち方次第で、より豊かな方向へと導くことができると考える。

「音」の聞こえ方についてはどうであろうか。大人は聞こえてくる「音」を全て「音」として認識し聞いているかということ、そうではない事がほとんどである。志村⁶⁾(2016)は、「大人は自分が必要な「音」のみ聞くことができる能力がある」と述べている。いわば、「音」を選択的に「聞いて」いるのである。「音楽」は「聞く」という意識があり、「音」と関わっていることが多いが、一方でBGMとして「音楽」を使用していることもある。「音の強弱・長短・高低・音色などを組み合わせで作った芸術」という「音楽」の本来の意味を考えると、BGMも「音楽」に違いないが、意識して聞か聞かないかで「BGM＝音」の在り方が変わると考える。⁷⁾

無意識のうちに、自分が必要とする「音」のみ聞いている大人に対して、胎児や乳幼児にとっては聞こえてくる「音」全て、「音」として認識されている。つまり、大人が認識していない「音」をも乳幼児は聞いていることになる。先にも述べたように、胎生5か月頃から「音」との関わりが始まっているが、まだ「音」の聞き分けが出来ない乳幼児にとって、「音＝声」をとおした関わりがとても大切であることが確認できる。例えば、乳児が泣くと間もなくかけつ

け「どうしたの」「おなかすいたの」「だっこなの」などと声をかける。たいていの場合は同じ人がお世話をする。日に何十回も繰り返される中で、乳児はその声や抱かれた感覚を覚えていく。そうすると次第にさまざまな音の中からその人の声を聞き分けるようになる。つまり、音を選択して求めるようになるのである。同じことは聴覚だけでなく視覚に関しても同様である。

そのため、「音」にあふれるこの日常において、子どもにとって良い環境とは何か考えていく必要がある。このことは、子どもと音あそびを実践する時も大切な事であり、私達が当たり前のように聞いている「音」や「音楽」に対しての意識や受け止め方、捉え方を意識することが、子どもに対して「音」の魅力や音楽活動の楽しさを伝えるヒントがあると考えられる。日常生活の中で「音」に興味をもてるような声掛けやあそびを行う事で、子どもの「音」に対する意識が高まり、その興味・関心が、子どもにとって楽しい充実した音楽活動を導くきっかけになると思われる。

4. 遊びの延長線上にある音との関わり ～フィールドワークを通して～

以下では、フィールドワークを通して観察された事例とそれに対する考察を示しながら、子どもと「音」との関わりについて検証する。

(1): 調査方法

調査対象：幼児3名（1歳10か月の女兒2名を以下Aちゃん・Bちゃんと、1歳0か月の女兒1名をCちゃんと示す）。

日時：2018年12月、松山東雲短期大学研究室にて実施。

方法：既成楽器ではなく、身近な道具や廃材（段ボール・レジ袋・新聞紙・小さい缶詰の空き缶・アルミ製のカップ・ペットボトル・乳酸菌飲料の容器・トイレトペー

パーの芯）を幼児3名に提供し、約1時間、「音」あそびの展開や、どのような音楽的自己表現があるか撮影しながら観察する。

(2): 事例と考察

事例1：〈ペットボトル、乳酸菌飲料容器を叩く〉

Cちゃんの母親がペットボトルを2つ両手に持ち、そのペットボトルを叩き合わせて「音」を出すと、Cちゃんも乳酸菌飲料の容器を2つ両手に持ち、母親の目を見ながら両手で合わせて「音」を楽しむ。すると、その様子を見たBちゃんもペットボトルを両手で持ち、「カンカン」と言いながら母親にペットボトルを渡して、一緒に「音」を楽しむ。また、Aちゃんが乳酸菌飲料の容器を両手に持って叩いていると、Cちゃんも同じように合わせて叩く。

母親がペットボトルを叩き合わせて「音」を楽しむ様子を見て、Cちゃんもずっと両手で持っていた乳酸菌飲料容器を叩き合わせると「音」が出ることを発見できた。また、その様子を見ていたAちゃん、Bちゃんも同じように他の道具を使って、2つのものを合わせて鳴る「音」を楽しみ、「音」を発見した喜びを親子間で共有していた。同じ空間で遊ぶことにより、他者の模倣が可能になり、1つの遊びが他の子にも広がる様子が観察された。また、その面白さを共有し、一緒に遊んでくれる母親の存在が、子どもの「音」あそびに対する興味や関心を深める結果になっている。

事例2：〈「きらきら星」を合唱①〉

Bちゃんが段ボールに上り立ち上がると、Aちゃんも同じように、もう一つの段ボールに立ち上がる。すると、Aちゃんが突然両手を大きくのばして、両手をひらひらさせながら「きらきら星」を歌う。その様子を見ていたBちゃんも一緒に「きらきら星」を合唱する。Cちゃんの母親も一緒に

歌うと、Cちゃんも持っていた乳酸菌飲料の容器を合わせて「音」を出す。

段ボールを叩いたり、投げたり、他のものと合わせて「音」を楽しむあそびは想定していたが、段ボールを舞台に見立てて、振りをつけながら歌唱する姿には驚いた。子どもはどんなものでもあそびに展開させる能力があり、自由に自己表現を楽しめる時間と環境を提供する事の大切さを再確認できた。まだ歌えないCちゃんもその舞台となっている段ボールを乳酸菌飲料の容器で叩き、母親と笑顔で参加している姿を確認でき、合唱発表会のようにであった。全員でその「音」と「音楽」の楽しさを共有できた事が子どもたちも嬉しく、その後のあそび《事例4》に発展したと考える。

事例3：〈アルミ製カップの音を楽しむ〉

Cちゃんがアルミ製カップを乳酸菌飲料の容器や空き缶で何度も叩く。その様子を見ていたBちゃんも同じようにアルミ製カップを手で潰したり、トイレットペーパーの芯で何度も容器を叩いたりする。

Cちゃんが口でくわえていたアルミ製カップを、もう片手で持っていた乳酸菌飲料容器で叩くと、今までとは違う「音」が鳴る事を発見し、空き缶でも何度も叩いていた。また、その様子を見ていたBちゃんもアルミ製カップに興味をもち、両手で潰して「パリパリ」と「音」がなる事を発見した。その後、潰せるまで潰すと、近くにあったトイレットペーパーの芯でカップを叩く遊びを楽しんでいた。容器がアルミ製だったため、潰すと形が変わり、潰す動作と「音」が関連していることを発見した。あそびがものの性質への気づきへとつながった場面である。

事例4：〈「きらきら星」を合唱②〉

約5分間、AちゃんとBちゃんの母親が不在だった後、母親が部屋に戻ると、Bちゃんはまた段ボールに上り、「きらきら星」を振り付きで歌い、

一緒に歌おうと母親を誘った。その後、別の遊びを楽しんだ後、突然Aちゃんが「き～ら～き～ら」と「きらきら星」とは違う、作り歌を歌い、その歌を母親も模倣して楽しむ。

約5分間、AちゃんとBちゃんの母親が不在だったとき、二人の「音」あそびは継続することがなく、とぎれ気味であった。また、それまでやそれ以降と比べると自己表現も少なかった。母親が戻ってきた直後に、Bちゃんが再び段ボールに上り、「きらきら星」を振り付きで歌った。母親も一緒に歌った事で、Bちゃんはとても喜び、数分前に母親が不在で寂しかった時間を歌唱する事で忘れていたようにも見えた。その後、その様子を見ていたAちゃんが突然「きらきらき～ら～」と「きらきら星」ではない、作り歌を歌いながら「きらきら星」と同じ振りで歌唱を続けていた。ここには自分の思った通りに発声できるよろこびが感じられる。母親はその歌を少しアレンジして「きらきらき～ら、きらきらき～ら」と歌うと、それを受けて、Aちゃんも同じように「きらきらき～ら、きらきらき～ら」と一緒に歌唱を楽しんでいた。ここにも大好きな母親と同じように発声できるよろこびがある。「きらきら星」をみんなと歌い楽しんでいた時間から数分経過していたが、「きらきら星」とは違う作り歌を、突然歌唱したことには驚いた。単に音を出す段階から音の出し方をコントロールできる発達をとげているのが分かる。楽しい気持ち、嬉しい気持ちが自然にAちゃんの作り歌につながったのではと推察する。自由に音を出せる（発声できる）発達とその表現を認めてくれる他者の存在が、このような子どもの音楽的自己表現を高めることになっている。歌（＝「音」）をとおして、子どもが自由に自分の気持ちを表現し、そして母親と感情を共有できたのである。

事例5：〈声色の違い〉

Bちゃんが乳酸菌飲料の容器をくわえて「うーうー」というと、いつもの声色との違いに気づ

き、面白がって何度もする。その様子を見ていたAちゃんも同じ容器を口にくわえて、「うーうー」と母親に見せる。

Bちゃんが乳酸菌飲料容器をくわえたまま、声を出す、いつもの声色とは違う「音」が出た事に驚き、何度も「うーうー」と言っていた。その様子を見ていたAちゃんも同じように容器をくわえると、母親に向かって「うーうー」と何度も楽しんでた。容器をくわえる事で、声色（＝「音」）の変化があることに気づいたようであった。発見のうれしさを伝えて他者と共有したい気持ちが表れている。

事例6：〈物を落とす遊び〉

Aちゃんが段ボールの上に、様々なものをのせてあそんでいると、偶然それが落ちた。その様子を見ていたBちゃんも、別の段ボールの上にペットボトルや缶をのせて手で払いのけると、大きな「音」が鳴り、母親が驚き「わー！すごいね！」と言った。その後、AちゃんとBちゃんが何度も段ボールに物をのせて、落とす遊びが続く。Bちゃんは、段ボールにもものをのせる時、母親の手をつかみ、「(の) しゃてー！」と願う。

段ボールにのせていたものが突然落ちたときに、素材の違いからいろいろな「音」が出た。一度に沢山のものが落ち、大きな「音」が出たことで、子ども達が大変驚いていた。しかし、その「音」に対して母親が「わー！すごいね！」と声をかけると、驚きの感情が楽しいことになり、Aちゃん、Bちゃんは声をあげて笑った。母親の声掛けがないと、ただ大きな「音」が出て驚いただけの出来事であるが、子どもの気持ちに共感した声掛けがあったことで、驚きから楽しい気持ちに変化し、遊びを継続するきっかけとなった場面である。また、偶然出た音から出してみようとして出した音の違いも大きい。

事例7：〈新聞紙あそび〉

Bちゃんが新聞紙をつかんで丸めて、「ポ

イッ！」と投げ、Aちゃんもそれを模倣して楽しむ。またAちゃんが新聞紙を丸めて「まんま」と言い、母親に渡して食べる遊びを続けていると、Bちゃんがアルミ製カップをトイレットペーパーの芯で混ぜる仕草をして料理ごっこあそびが始まる。

Bちゃんがつかんだ新聞紙を丸めると同時に「クシャクシャ」と「音」が出、その丸めた新聞紙を投げると新聞紙が広がり、「バサッ！」と「音」をたてて落ちる様子が面白かったようで、何度もその遊びを繰り返していた。新聞紙を丸めると形が変化すると同時に「音」が出て、投げる事で形がまた変化し「音」をたてて落ちる様子が面白かったのではと推察する。

事例8：〈ペットボトルの音が出ない〉

Aちゃんがペットボトルを片手でもって振るが、「音」が出ない。その後、ペットボトルをもう片手でたたくと「音」が出て、叩き続ける。

振って「音」が出ない事が不思議だったようで、一度ペットボトルの中身を確認した。その後、もう片手で「パンパン」と叩いて、母親とその「音」を一緒に楽しんでた。使えるようになった手で対象に働きかけたが、「音」が出なかったため、別の方法を自分なりに考え、関わり方を変える賢さに感動した。母親が抱っこした状態だったが、母親と一緒にその「音」あそびを楽しんでいたことが、「音」を違う方法で発見するきっかけになったと考える。

今回の観察実験から、子どもの音楽的自己表現は、構音器官が未熟の喃語期と思ったように音が出せる発声期とではその楽しみ方が異なること。

そして発声期になると大人や友達との関係（人間関係）、諸感覚の発達（健康・言葉）や、身近にあるものの性質に気付き自分で発見する喜び（環境）など、他領域との関連が深いことを再確認した。このことから、子どもの音楽的発達を総合的に捉え、

音楽的技能習得に偏ることのない、環境を提供することの重要性に改めて気づかされる結果になった。

5. まとめ

「音」は形に残らない、一瞬の存在である。「音」を聴いた人の心にその「音」の印象が残る事はあっても、存在が残る事はない。「音」以外にも、入浴中曇ったガラスに描く線や絵、砂場に描く絵なども同様である。その描いたものが永久に残る事はほとんどない。これらのあそびは、多くの子ども達がごく普通に行っており、自己表現するにあたって特別な道具が必要ない。

今回の観察実験でも、子どもの「音」あそびにおいて特別な道具や楽器は必要ないことが明らかとなった。動かすことが容易になった身体の部位を上手く使い（声であれば喃語期なら喃語を、発声期なら出せる音を使い）、その時の環境の中で、自己表現をしているだけであった。子どもは、言葉にならない気持ちを身の回りにあるものを利用し、「音」や声をとおして他者へ伝える。その表現に対して母親が共感を示すことによって、その遊びが継続されることが確認できた。

実験中、約5分間、母親不在の時間があったが、その時間帯のみAちゃん・Bちゃん共に、「音」あそびが継続することがなく、自己表現が極端に少なくなっていた。子どもの要求に応え、「音」の面白さを共有できる存在の必要ことが確認できた貴重な場面であった。

また、子ども間で相互の動きを模倣するあそびが展開される場面が多々あり、他児との関わりが「音」あそびの発展に繋がっていることも確認できた。道具や楽器にこだわるのではなく、子どもの自由な表現ができる環境と、子どもの自由で素朴な音楽表現を受け止める他児や大人の存在が重要であると考えられる。

子どもの「音」あそびを観察していると、筆者自身のピアノ経験を思い出し、双方に共通点が多々あ

るように感じる。ピアノを人前で披露する時、雑念が全くない状態、すなわち良い集中力を保ち演奏に没頭できた時、心の底から自分の奏でる「音」を楽しむ事ができる。と同時にその感情を観客と共有することができる。これは、子どもが「音」あそびに没頭する時も同じではないだろうか。偶然出た「音」に興味をもち、自分の気持ちを「音」をとおして表現し、自己表現を楽しむ。その時、子どもは自由に「音」を楽しみ、あそびに没頭する。本当に「音」を楽しむということは、他者からの評価を気にすることなく、あらゆる雑念を切り離し、自由に自己表現を楽しむ事だと考える。

加えて、保育者が子どもの自由な表現を受け止め、共感する気持ちをもつことや子どもの日常生活やあそびを見る観察力をもつことが重要になる。それが子どもの表現力を支えるからである。子どもたちにとって身の回りのもの全てが楽器となり、聞こえてくるもの全てが音楽へと繋がる可能性がある。それを考えれば、子どもの興味や欲求に応えられる環境を用意することが保育者に求められる。

6. 今後の課題

現在、多くの保育現場からピアノの技術向上を求める声が上がっている。だが、保育者養成校においてはピアノ技能に自信がもてずに悩む学生が多い。学生自身が幼い頃から音楽活動を楽しむことができているからである。学生も指導する教員も、技術向上に集中するあまり、学生が「音」や「音楽」の本来の意味や魅力を理解できず、「音」を楽しむ経験がないまま、保育現場にて実習を経験し、そのまま就職するケースが多く見られる。

その結果、就職後もピアノ演奏にストレスを感じ、退職の原因にもなっている。高度なピアノ演奏技術がある事で音楽活動の幅が広がり、子どもにとっても充実した時間を提供できることは間違いない。

しかし、保育現場に必要な音楽・表現領域においての保育技術とは、ピアノ演奏だけではない。本研

究で明らかにしたように、日常生活において子どもの「音」をとおした他者との関わり大切さを理解し、「音」=楽器ではなく、「音」ができるもの全てが、子どもにとって気持ちを表現できる素晴らしい楽器になることを理解してほしい。

そして、「音」=声でもあり、リズムを伴った言葉かけや歌唱も大切な表現手段である。今回の観察実験でも実証されたが、子どもは自分の気持ちを感じたまま、自由に歌唱で表現することができる。そのためにも乳児期から幼児期にかけての自由に思ったように音が出せる発声期のよろこびについて引き続き注目していきたい。

また、子どもはどのような物でも楽器に変える事ができる素晴らしい才能をもっている。「音」や「音楽」をとおした子どもとの関わりが特別なものではなく、大切なことは日常生活の中に溢れていることを再認識したい。そして、今回取りあげたような事例の中の「音」あそびの延長線上にさまざまな音楽活動を位置づけたい。子どもが自由に「音」をとおして自己表現を楽しめるように、気持ちを共有できる保育者の存在とそうしたあそびが展開できる環境の大切さをこれからも伝えていきたい。

そのために、まず、保育者を目指す学生自身が「音」や「音楽」を楽しみ、「音」や「音楽」が自分にとって大切な表現手段であることに気付く経験を提供していきたいと考えている。子どもと「音」をとおした関わりの意味や重要性を理解する事が、保育者養成校の音楽・表現領域において求められている本当の保育技術だと思うからである。

謝 辞

本研究を行うにあたりましてご協力頂きました、児嶋雅典先生、高橋洋行先生、荘巖茶茶先生、そして、松山東雲短期大学保育科の学生の皆様に深く感謝を申し上げます。

脚 註

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』、平成30年2月、67-68頁
- 2) 小西行郎・志村洋子・今川恭子・坂井康子『乳幼児の音楽表現』、中央法規社、2016年、16頁
- 3) 児嶋輝美・古本奈奈代・山本奈穂「音楽表現に関する保育の自己評価について（1）—子どもの育ちと評価の関連—」『日本保育学会第67回大会発表要旨集』、2014年、873頁
- 4) 井上裕子「人と音楽の関係—音楽が私たちに与えてくれるもの—」、『大阪城南女子短期大学研究紀要』第48巻、2014年、25-35頁
- 5) 古市久子「絵本がもつリズム性がこどもに与える教育的意味」、『東邦学誌第41巻第1号』、2012年、109-125頁
- 6) 小西行郎他、前掲書、10頁
- 7) 『新選国語辞典』第6版、小学館、1988年、「音」153頁、「音楽」169頁